シリーズ

新・農業人

「大切なのは人」を信念に
７代続く酒米農家として
伝統と革新の共存をめざす

株式会社AgLiBright

藤岡 啓志郎さん

トラクターの運転も最初は苦手だったという（右上）
受け継いだ畑で地域の特産・黒大豆の生育を見守る（左上）　手伝ってくれる仲間とニンニクの皮むき作業に励む（左下）

所在地●兵庫県多可町
就農年●2019年
経営規模●酒米8.6ha、米粉用米2ha、主食用米36a、ニンニク5.6ha、黒大豆3.4ha
従業員●２人
URL●https://www.blackgarlic-alb.com/

人を幸せにする農業

兵庫県の中南部に位置する多可町中区坂本地域は、「酒米の王様」と名高い山田錦の一大産地として知られる。地域と酒米の歴史は、山田錦の母に当たる山田穂という品種が多可町で発見された明治時代までさかのぼる。１９３６年、兵庫県立農事試験場などによって山田錦が品種登録されて以降、現在も山田錦の生産量の約６割を兵庫県産が占めている。

株式会社AgLiBright（アグリブライト）代表の藤岡啓志郎さん（29歳）は、ここ多可町で代々続く農家の７代目だ。父から経営を継承するかたちで２０１９年２月に会社を設立し、酒米８・６ヘクタールのほか、米粉用米２ヘクタール、主食用米36アール、ニンニク５・６ヘクタール、黒大豆３・４ヘクタールを生産している。

坂本地域では以前から、栽培契約を結んでいた酒造会社の要望を受けるかたちで環境保全型の農業を推進してきた。山田錦の有機栽培は05年から始まっていたという。藤岡さんも坂本地域の農会長を務めていた父の農法を受け継ぎ、酒米も米粉用米も主食用米も、基本的に化学肥料・農薬不使用で栽培している。

ニンニクについては、高齢化に伴い年々増えていく耕作放棄地の受け皿として、そして地域に深刻な被害をもたらしている鳥獣害対策として最適な品目だと判断し、啓志郎さんの代から本格的に栽培を開始した。こちらも無農薬・無化学肥料で生産し、一部は黒ニンニクに加工して多可町の新たな特産品にしようと、「黒葫玉（こくこおう）」の名前でブランド化している。

黒大豆は多可町が丹波篠山市に次ぐ有数の産地であり、こちらも父から引き継いで生産している。

同社の社名の由来は、「農業（Agriculture）と希望を繋ぎ（Link）、より光り輝くもの（Bright）を生み出す」という造語から来ている。「最高の農産物は最高の『人』から生まれる」というビジョンのもと、「一人でも多くの方に最高の農産物を届け、最高の農産物から笑顔を生み、笑顔から幸せを創造し、皆様の未来づくりに貢献します」という経営理念を掲げる。自社の利益でなく同社の商品を買った人、食べた人の幸せを追求するという、非常に社会貢献度の高いスローガンだ。

ところが藤岡さんは、「実は拝金主義だった過去もありました」と

笑う。一体、現在に至るまでどのような考え方の変化があったのだろうか。

予防医学から農業の道へ

藤岡さんは生まれも育ちも多可町だが、もともと家業を継ぐつもりは一切なかった。関西学院大学理工学部に進み、生命科学を専攻。タンパク質が体に及ぼす効果といった生活習慣病について研究していた。

自身の肌が弱かったこともあり、将来は製薬業界や化粧品業界に進みたいと考え、それらの仕事を通じて「とにかくお金を稼ぎたい」と思っていたそうだ。

より専門的に研究するため、そのまま大学院に進学しようとしていたころ、授業で予防医学について知る機会があった。病気になってしまってから薬などで治療するのではなく、その病気にならないよう未然に防ぐというアプローチもある。その考え方に触れたとき、自分の原点である「食」がいかに大切なものか、真に理解した。

幸い、自分には先祖から受け継がれた農業の基盤がある。それならば、その財産を生かして自分も農業に携わり、そこから人々の健康に貢献したい。そう決心してからの藤岡さんの行動は早かった。とりあえず大学院を卒業するという選択肢や、民間企業に就職してから就農をめざすという選択肢はその場で立ち消えた。

農業の知識を身に付けるための研修の場として、日本国内ではなく米国を選択。公益社団法人国際農業者交流協会（ＪＡＥＣ）という、就農志望者のために海外農業研修をあっせんする団体を探し出してエントリーした。

無事選考を通過し、大学院を半年で中退。残りの半年間で、トラックやクレーンなど、農業に必要な免許・資格を片っ端から取りつつ、県内の大型農業経営体での実習も受け、翌２０１７年春に渡米するという怒涛のスケジュールをやってのけた。「何でも挑戦するなら若いうちの方がいい。早く始めれば、失敗したとしてもやり直しが利くから」という信念のもと、自分の決めた道を、まっすぐ着実に進んでいった。

米国を研修の場に選んだ理由として、需要が先細りする国内市場だけを見据えていてはいけないという危機感があったと藤岡さんは明かす。世界をリードする米国の農業を知っておくことで、今後の経営へのヒントを得たいと考えたのだ。

また、ＪＡＥＣを通じて派遣されるプログラムは、いわば日本でいう外国人技能実習制度のようなもの。つまり、自分が研修生の立場となって海外の農業を眺めるという、藤岡さんにとって貴重な機会となった。

人生観を変えた米国研修

藤岡さんが割り当てられた研修先は、日本の大手種苗会社のカリフォルニア拠点だった。藤岡さんはそこで、ブロッコリーやニンジンなどの野菜を交配し、新品種を開発するブリーダーのアシスタント業務を担当した。端が見えないほど広大な農地で、ひたすら手作業で定植していくといった農作業を通じ、ちょっとやそっとではへこたれないハングリー精神が叩きこまれていった。

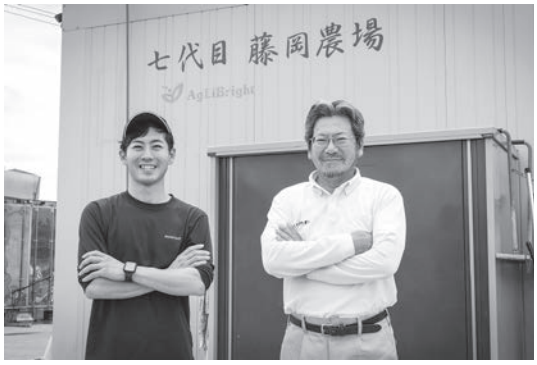
また、メキシコや韓国、ブラジルなどさまざまな国から来た研修生との交流も藤岡さんにとって大きな刺激となった。1分1秒も無駄にすまいとキビキビ主体的に行動する彼らの姿を見て、自分がそれ

無農薬・無化学肥料で手間はかかるが、「おいしい農産物を届けたい」という信念を貫く

まで身を置いていた環境との違いを感じ、負けてはいられないと感じた。

そして研修先では、藤岡さんが今でも人生の師と仰ぐ上司との出会いがあった。日本本社から派遣された駐在員で、ブロッコリーの育種を統括するブリーダーであり、社内起業家としても活躍する人物だった。彼は藤岡さんの「少しでも早く成長したい、この研修を通じて社会で通用する人間になりたい」という熱意を汲み、マンツーマンで藤岡さんの精神を徹底的に鍛え上げてくれた。

藤岡さんがその日の研修のことや、世の中のニュースを受けて考えたことなどを毎日ノートに記し、その上司に渡すと、それを毎回添削してフィードバックをしてくれた。そのやり取りを経て、農業以外にも大切なことをたくさん教えてもらい、視野が大きく広がったという。ヒト・モノ・カネの中で本当に大切なのはヒトであり、カネは後から付いてくるものだと、藤岡さんは人生観を新たにした。



父・茂也さんの支えは大きい

手探りで販路を開拓

約1年半の研修を終え、2018年秋に帰国した後は、これまた破竹の勢いで就農の準備を進めていった。

事業計画は米国滞在中にある程度練ってあり、生産も父の手を借りて開始したが、法人登記や定款、企業のホームページ、商品のパッケージデザインの作成といった諸手続きは、費用の節約のためすべて自前で賄う必要があった。19年2月に法人を設立してからも寝る間を惜しんで働き、その忙しさのために一度過労で倒れてしまったほどだった。

また、啓志郎さんの代から生産に力を注いだニンニクは、新たに販路を開拓しなければならなかった。それまで営業の経験もまったくなかったうえ、ちょうど新型コロナウイルス禍と重なってしまい、販路の開拓は困難を極めた。

それでも地域の有機農家に紹介してもらったり、展示商談会に参加したりしながら手探りで販売先を探す日々が続いた。そのなかでも、同じ参加者で「この人の営業力はすごい」と感じる人がいたらすかさず声をかけ、コツを教えてもらうなど、とにかく貪欲に学ぶ姿勢を貫いた。

会社設立から2～3年経ったころ、有機農産物を取り扱う生協・宅配業者を中心にようやく販路を数軒確保でき、そこでやっと経営が軌道に乗ってきたという実感が得られたそうだ。

地域と家族への想い

新たなことにも臆せず挑戦していく藤岡さんだが、地域の農地や伝統を守っていきたいという強い使命感も同居している。地域の特産品である酒米や黒大豆は、愛情を込めて生産する祖父や父を見てきたからこそ、生産基盤をそのまま引き継いだ。そのうえで効率性を追求し、収益とのバランスを取ろうと模索している。また、農地の荒廃を少しでも食い止めたいという思いで耕作放棄地をどんどん引き受け、ニンニクの作付面積を拡大しているところだ。

さらに、「人々の健康に貢献したい」という思いから、有機農業の取り組みを加速している。取引先を見つけるにはまとまったロットが必要なため、「多可町有機農業推進協議会」という、地域で有機農業に取り組む農業者の任意団体に加入し、価値を認めて購入してくれる販売先の確保に動いている。

今もまだ何事においても試行錯誤を続けている状態だが、「家族や周囲のサポートなしではここまで来られなかった」と藤岡さんは言う。なかでも父・茂也さん（62歳）との連携には目を見張るものがある。啓志郎さんが就農を決意したときから、茂也さんはすべての権限を啓志郎さんに移譲して全面的なバックアップに回ってくれた。機械の操作や修理などが苦手な啓志郎さんに代わって、工学系の作業を手助けしてくれることも多いという。

坂本地域で連綿と続いてきた藤岡家の農業は、啓志郎さんによって今、新たな扉が開かれようとしている。

（編集部　大谷 香織／文
衞藤 克樹／撮影）